

いつかは化ける

波 瀾 剛

頭が良くて要領も良いのだが、ほとんどやる気のない学生。それから、やる気だけは十分だが、要領が良いとはとてもいえない学生。はたして対処しやすいのはどちらの学生か。このようなことを問われても、即座に二者択一で答えることはできない。どちらにしても、なかなか手強い相手である。大学に就職して二年目。最近ふとそんなことを考えてみたりもするのだが、昔を振り返ると、私自身は間違いなく後者のケース。つくばにいたときのことを思い出せば、空回りして名波先生を困らせた出来事が次々と浮かんでくる。

大学院に入った当初、元営業マンという雰囲気から脱皮していない私は、論文を書こうとしても文章の調子が見積書や企画書ようになってしまった。「波瀾、論文はビジネス文書じゃないんだから、もうちょっと詳しく説明を書かないと。」「波瀾、これじゃ日本語になってないよ。」「波瀾、もう少し分かりやすく説明しないと。」と、授業でも勉強会でもダメ出しが延々と続く。しかも丁寧に添削をさせていただいた文章を無視して、次に見せるときには全く前とは異なる、文章ともなっていない文章が飛び出してくる。たまったものではない、と今では思うのだが、当時の私はただただ必死。先生のことなどお構いなし、という調子でどんどん書いてはダメ出しされていた。

文学を専攻する学生はもともと文章を書くのが上手という定説を覆すような問題児の登場。名波先生はそんな学生でも根気強く指導してくださった。すると時間が経つにしたがって、少しは状況が好転し始める。先生からの注文の数が、徐々にではあるが減少の兆しを見せ始め、修士論文を終えて博士論文の完成が近くなってきた頃には、あくまで確認のため草稿を持参する、という程度にまで手が掛からなくなった。そろそろ博士論文提出かという頃、「波瀾、もう少し難しく書いてもいいんだぞ。」という言葉聞いた時にはそんな段階まで来たのかと安堵した。その日の記憶は今でもすぐによみがえってくる。

初志貫徹といえれば聞こえが良いのだが、博士学位を取得するにあたってやる気と体力だけが取り柄では受け入れた側の苦労は相当なもの。いつかは化ける。そう思って長い目で育てていただいたのだとしみじみ思う。私もいつの間にか大学院生から先生と呼ばれるようになっていたのだが、まだまだ名波先生のようにには対応できていない。学生に性急な変化を求めてしまいがちだ。少しくらいおかしな文章だっ

て、何だこれかと思う拙い論の構成だって、じっと待っていればいつかは劇的に変化する。学生の指導に迷いを感じたら、在りし日の自分のことを思い出せばそれで良いのだ。たしかに昔の自分は酷かった。

学生の身分で始めた結婚生活もすでに九年目。披露宴でいきなりスピーチをお願いして先生を慌てさせた日からずいぶんと月日が経った。ここまでたどりついたのは、先生の御指導の賜物。金貞愛ともども感謝しております。